

## 四国支部親睦会

竹崎 浅吉

昭和五十一年二月二十八日(土)  
於 高知市 美門旅館

四国支部長の東條順吉さんが、九十歳の高令を以て、一月二十三日に亡くなられました。鈴木商店に勤務せられたのは明治時代と承っておりますが、退職後郷里高知に帰り、長い間海運業に従事して其の発展に貢献されましたが、晩年は高知県下の海運業関係の各団体の顧問となられ、又高知愛蘭会長や竹林寺の檀信徒総代などもやっておられました。

二月二十八日に法要が行われるとのことで、この日に久しぶりの四国支部の親睦会を開くこととなり、大敷網漁業の仕事で忙しい支部幹事の小松豊秀さんから、会の準備万端手配方竹崎浅吉に依頼がありました。会員約四十名のうち十一名出席、神戸の本部から柳田さんと畑さんが出席下さって、二月二十八日正午金子直吉翁にゆかりの深い美門旅館に集合。一同ハイヤーで雨風の吹き荒れる中を東條家に到着、美しい広い庭園の見える部屋で、先ず柳田さんから哀悼の辞を霊前に捧げられ、つづい

て一同焼香して東條さんのご冥福を祈り、茶菓をいただいた後旅館に帰り、午後二時から親睦会を開きました。

先ず世話人竹崎の挨拶、柳田さんと畑さんの挨拶のあと宴にうつり各自の近況報告あり。ついで後任支部長の件について相談致しましたが、東京に滞在中の小松豊秀さんから竹崎氏を支部長に推薦する旨の電報が来ていた関係もあって、結局竹崎浅吉にきまりました。当日は悪天候に關係なく一同落ちついて酒を酌みかわしましたが、畑さんを始め次々と隠し芸が出て大変賑やかでありました。特筆すべき事柄としては、金子直吉翁にゆかりの深い土地に記念碑を建立することについて意見が一致したことでありました。いづれ辰巳会の皆様のご賛同を得て実現致したいと思えます。午後五時過ぎ次回の出席を約束して散会致しました。

出席者

本部 柳田 義一 畑 薫  
支 部 小原恒太郎 (松山市)  
上久保秀樹 岡林 治  
佐分利 勇 佐藤 勝喜  
竹崎鶴太郎 武内 雪恵  
松木三四郎 傍士 雪子  
山崎 勝吉 竹崎 浅吉



四国支部長  
東條順吉翁を偲ぶ

一将功成り万骨枯る とはわが辰巳会四国支部の為に絶大なる御協力を賜った東條順吉翁の御言葉ではないでしょうか。

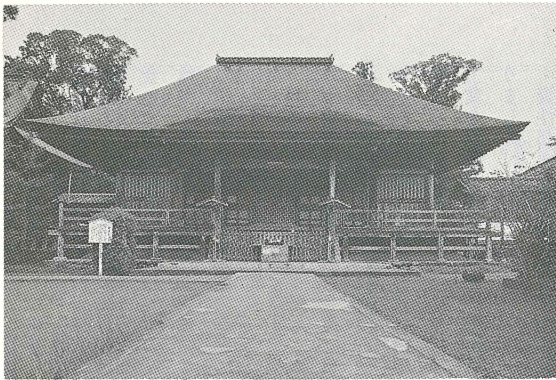
去る一月二十九日九十歳の御高令を以て天寿を全うされたとは云々、童顔のあなたとは一會二期再び茲に御慧眼に接することの出来ぬ恨みは到底尽きません。御在世中の終始変らぬ御温情に対する感謝と永久に泰らかな御冥福をひたすら祈る次第であります。想いまするに翁は去る明治二十一年一月三十日高知城下に呱呱の声を挙げられ御成長、明治三十八年高知商業学校を御卒業後、当時同校に教鞭を執っておられた金子直吉翁の親友横山又助先生に伴われ他の同窓生と共に神戸鈴木商店に入社されました。幼少より誠実勤勉の翁は恒に大先輩金子、柳田らの膝下に孜々として立ち働かれ、

### 東條さんの法要と懇談会をすませて

去る昭和五十一年二月二十八日  
まる五年振り四国支部懇談会が開かれることになった。

この日は、去る一月二十九日九十歳の天寿を全うされた四国支部長東條順吉氏の忌明けに因み、その法要に四国在任の会員諸兄十一名と空便で到着した本部柳田、畑氏ら、正午過ぎ春雨の中を東條邸に靴を脱いだ。静寂なるお座敷には床には故人好みの蘭の香も高く床の曼陀羅の前には遺影が飾られていた。又、苔むす庭の木々も哀しげに降る雨に滴を垂れていた。

国分寺金堂(室町時代)



漫談の花盛りを呈したことは愉しく、且つ大いに若返った。宴の終る前、席上に於いて新支部長として竹崎浅吉氏を万場一致で推すことに決し、拍手を以て今後の御支援を強調した。宴は惜しくも予定の時鐘にて、互の健康を祝し合い再会を約して解散したのは午後五時過ぎであった。雨は尚降りつづいていた。

青雲の志を抱き入社されたのにもかわらず、御一身上の都合上止み難く退社され御帰郷、明治四十三年東條回漕店の自営に踏み切られました。而して茲にこの翁の奇き人生双六は急角度に転開され、高知の海運界に身を委ねられ、高知の海運界に身を委ねられ、斯業の重鎮となられ過去六十五年の成果はその経歴書が正しく実証するところ何等疑う余地はありません、されば昭和三十年には機帆船海運業育成に関する運輸大臣よりの表彰状、更に昭和三十八年には藍綬褒章、昭和四十一年には勲三等瑞宝章を下賜され陛下に拝謁仰せつけられる等、翁の栄誉之に過ぐるものはありません。生来最も気易く庶民的であった翁は極めて多趣味の仁として愛敬され、忙中閑、サツキ山造り、蘭造りには専念された事等、衆知のところ余りにも有名であった。書道に於いても大家山崎大抱、竹村子雀先生に師事され日夜怠ることなく熱心に続けられその手柄話はその周辺がもつともよく聞かされたところでした。書道に繋がる挿話として友人山

一にて国分寺の前に到着した。本堂の前は遍路の巡礼姿が列を成していたが、われらも屢し仲間入りして合掌、東條さんの御冥福も祈った、金堂内陣には平安時代の優秀なる薬師如来(重文)が慈眼の眼を輝かされていた。その又向って左側の鎌倉期の薬師如来(重文)之又美しく二体の対象的な写実的な彫刻には胸の迫る思いがした、この建築は土佐の豪主長宗我部之公の再建になるもの。現在と雖も外観古拙であるが高雅で閑寂の気

### 足立宇三郎兄に憶う



兄は、本年に入りて三月脳軟化症の為尼崎の牧病院に入院加療されたのにもかかわらず、病勢衰えを見せず、遂に去る四月十一日八十四才の齢を重ねて昇天されました。誠に寂莫の感に堪えませんが、足立さんは明治二十四年十一月、滋賀県新旭町饗庭村で誕生されました。御実家は代々村長を勤められた御家柄でありましたが、嚴

### 土佐国分寺詣

例会の翌日二月二十九日夜来の大雨降りやみ、宿に休憩していたところ、竹崎支部長来訪。今回の来高の謝辞を述べられ、之から土佐日記ゆかりの地土佐国分寺を案内してやろうと云われる。旅館を出た三人は、先ず高知城下の日曜市、延々たる市の両側は植木市、骨董市、雑貨市、野菜果実市等大衆で黒山を築いているのに驚いた。ここを通り抜け帯屋町の鮎屋で簡単に昼食をとり一本のビールで、新支部長の弥栄を乾盃した……食後バスにて後免町に下車、ハイヤ

崎 功さんから洩るところ、或る夏の日、大阪から帰国の途中疲れが出たものか洋服を脱ぎ靴をぬぎ車中での白河夜舟の高鳴き、ふと眼を醒ますと座席の大トランク(御自慢の書道の作品充滿)上衣、ズボン、靴、財布、身の廻り品、悉く盗難に罹ったことに気付かれ吃驚り早速車掌に談判したがあと祭りの高知駅に着くと駅長室にステテコ一つで飛びこみ会社の運転手を電話で呼び出し「俺は裸だ裸だ」と大声をあげて衣類を取り寄せたと云う翁の半面が惚ばれるではありませんか。今から五年前昭和四十六年、翁の肝入りで岡豊城レストランで辰巳会四国懇親会が開かれ嬉しい一瞬を過ごしましたが、解散の時「又やろうぜよ」と云われた土佐訛りが未だ私の耳から消え去りません。今日翁の忌明けに際しまして支部会員の御参集誠にふさわしく、仏縁に因るところ尠くないと感慨無量であります。本日の御仏事に当りまして撫辞ではあります、御生前に対する御礼のことばと致します。何卒御享け下さい、併せて御遺族様の御健康を御祈り致します。鳴る添水回香の経を叩いてる 辰巳会本部代表 柳田 義一

品を備えている。その他天平創期の梵鐘、室町期の光明曼陀羅図、創業当時の布目瓦(複弁)等、文化財の数々が保存されていたことが嬉しかった。午後三時過ぎ樓門を出てバス停で竹崎支部長と名残り惜しくも別れを告げ、畑さんと播磨屋橋附近を練り歩き旅館に戻った。之は土佐を訪れる人の見逃しならぬ文化財と推賞を吝まさない。雨降って遍路の鈴も濡れている (編)

父は大坂高麗橋明治屋へ丁稚奉公に出ることを勧められました。一年の後の或る日、一途向学心に燃えた足立青年は、その志も堅く父君へ説得の末、同志社中学に入學され続いて同志社大学へ進学、優秀なる御成果を挙げられ大正五年無事卒業、直に鈴木商店に採用と云うことになりました。引見の際西川支配人から「貴公の学歴研究から見工場向きだ」と烙印を押され、当時敏馬に在った東レザ(株)に所属されることになりました。今から思えば、これが兄のゴム業界に精進される切掛けとなった

